

近世越中の教育事情

～広徳館・私塾・寺子屋～



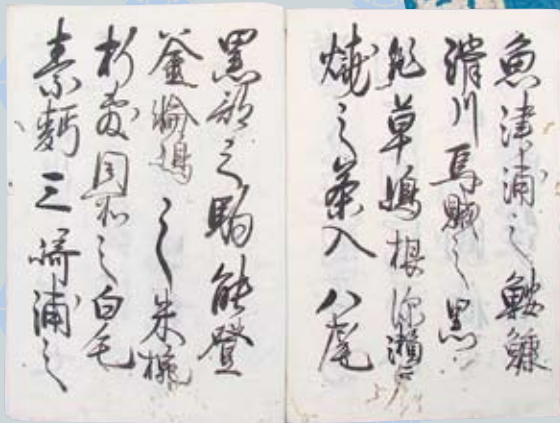
岡田呉陽像
（『呉陽遺稿』）
富山県立図書館蔵



海内果像
老田小学校蔵



『詩経』（広徳館本）
県公文書館寄託文書（個人蔵）



「加越能三州往来」富山県公文書館寄託文書（個人蔵）



「算用指図書」富山県公文書館寄託文書（個人蔵）

開催期間

平成24年 金 9月28日 ~ 11月3日 土

開館時間

9:00 ~ 17:00

入場無料

会期中無休

目次

開催にあたって	1
はじめに	2
富山藩藩校―広徳館―	
設立の経緯	2
文武両道の教育内容	3
厳しい進級試験	4
学風と儒官	4
出版事業	4
広徳館の廃止	5
私塾	6
寺子屋	9
岡田呉陽とその弟子	13
おわりに	15
主な参考文献	15
富山藩広徳館・加賀藩明倫堂略年表	16
企画展史料一覧	17

開催にあたって

近年、江戸時代に行われた教育が注目されてきています。わが国は、明治以降急速な近代化を実現し、いち早く欧米列強に対抗しうるほどの発展を遂げることができました。このような国家の発展は、教育の力に負うところが大きいと考えられます。明治期の国家による学校教育の推進を可能にしたのは、江戸時代中期から広がった藩校および私塾での教育や、寺子屋で行われていた「読み・書き・そろばん」という教育の基盤が整っていたからだといわれます。

現在本県においては、藩校「広徳館」にちなみ、富山県の将来を担う若い世代を育成する目的で「平成広徳塾」が開催されています。また全国的に、庶民教育を担った寺子屋に注目が集まっており、各地でさまざまな形で現代の教育に生かそうという動きが活発化しています。

今回の特別企画展では、江戸中期から幕末、明治初期にかけて、郷土富山県にあつた広徳館・私塾・寺子屋の概要ならびにその教育事情について、当時使用された四書五経や往来物などの教科書を中心に展示・解説します。これを機会に、郷土富山の歴史への関心を深めていただければ幸いです。

今回の企画展を開催するにあたって、多くの方々や機関からご協力を賜りました。ここにご芳名を記して感謝の意を表したいと思います。

富山県立図書館 富山市郷土博物館 富山市立老田小学校 高岡市立中央図書館 高岡市福岡歴史民俗資料館
光厳寺（富山市） 五十島和男（富山市） 海内宏憲（富山市） 高堂肆郎（富山市） 高浪巖（富山市）
堀田いずみ（高岡市） 羽馬美代子（南砺市） 半田景康（三重県）

（順不同敬称略）

平成二十四年九月

富山県公文書館

はじめに

江戸時代の教育は、国家の指導による体系的・画一的なものではなく、士農工商という身分制度や職業に応じた教育が実施されていた。武士は、支配者としての教養や領地支配のための能力、農民（村方三役）は村方支配に必要な能力、商人は商売をするための能力が必要であった。

江戸中期頃から藩政改革のために優秀な人材を育成することを目的として諸藩において、藩校が設置された。この目的により、宝暦期（一七五一～一七六三）から天明期（一七八一～一七八八）にかけて、全国的に数多くの藩校が設置され、富山藩校広徳館もこの時期に創設された。

また、新しい思想や、高度な知識を求める人々の要求に応じて、私塾が開設され、町人や農民など広く庶民に開放された。寺子屋では、「商売往来」や「庭訓往来」などの往来物を使って、「読み・書き・そろばん」の実務教育が徹底して行われた。

藩校・私塾・寺子屋がそれぞれの立場で藩政中期以降の教育を推進し、やがて明治以降の国家による教育の近代化の基盤となったのである。

今回の特別企画展では、江戸中期から明治初期にかけて、郷土富山県にあった広徳館・私塾・寺子屋の教育事情について紹介する。

富山藩藩校―広徳館―

設立の経緯

富山藩では、藩校広徳館を中心に儒学が盛んに学ばれた。広徳館の設立は、藩校としては全国で六十二番目のものであり、宗家加賀藩の明倫堂より二十一年早い創設である。それ以前の学問奨励として富山藩二代藩主前田正甫が、天和元年（一六八一）に儒者の南部草寿（？～一六八八）を富山に招聘して、朱子学の講義を行わせたことがあげられる。富山藩儒医の杏一洞が長崎聖堂

で草寿に学んだことがあり、草寿の招聘は一洞の推挙によるものである。

南部草寿の死後、養子の景衡（南山）およびその長男の景春へと受け継がれたが、景春が早世したため、南部氏は絶えた。この三人は南部三代と呼ばれ、富山藩学の基礎を作った儒者である。

享保十年（一七二五）に、杏一洞の長男の三折は藩に学問所の設立を建議したが、きぎいれられなかった。これが富山藩校設立の企画の初めであった。

安永二年（一七七三）正月に、六代藩主利與が文武に専念すべきこととして藩校設立の趣旨を申し渡し、家臣を江戸へ派遣して江戸の学問所（のちの昌平坂学問所）を調査させている。

広徳館の設立については、利與の強い意思があった。「利隆御代條目」（前田文書）によると、利與は当時の藩士たちの土風の頹廢を憂えている。藩士たちの間には、武芸については鍛錬を心懸けているが、一方で学問については熱心でない者がかなりいたようである。このような状況に対し、利與は文武ともに心懸け、特に学問によって忠孝の道を学ぶことが大切であると論じ、文武に不精の者は容赦なく「永之御暇」をとらせるとした。

当時、藩財政は窮迫しており反対意見もあったが、低下墮落していた土風を立て直すためには藩校を設け、学問を振興する必要があると、利與は考え、藩校設立が決定された。

安永二年六月十八日、利與の臨席のもと、広徳館が開講された。

創立当初の校舎は、富山城三の丸の外堀の東側、総曲輪に建てられたが、後に文化七年（一八一〇）、城内三の丸に移された。



南部三代の墓(富山市 光厳寺)

江戸より招いた三浦平三郎衛貞(瓶山)を初代学頭として、朱子学と徂徠学の意味を説明し、次いで『論語』の講釈が行われた。そして講釈の最初に藩校広徳館の名が『詩経』の一節に由来することが明らかにされた。

『詩経』(魯頌「泮水」)の一節に

「濟濟多士、克廣徳心、桓桓于征、狄彼東南」

とあり、ここから「広徳館」と名称がつけられたのである。

文武両道の教育内容

広徳館では文武両道が重視され、文学の教授科目は、儒学を中心とするもので、四書(大学・中庸・論語・孟子)と五経(詩経・書経・礼記・易経・春秋)の素読と講義、および習字と作文を必修とした。後に、蒙求・十八史略・春秋左史伝・史記・日本外史・作詩などが課された。

	六ツ	正八ツ 九ツ
一 の 日 (1・11・21)	素 読	読 文 会
二 の 日 (2・12・22)		講 積
三 の 日 (3・13・23)		質 問
四 の 日 (4・14・24)		会 読
五 の 日 (5・15・25)	休	日
六 の 日 (6・16・26)	素 読	講 積
七 の 日 (7・17・27)		会 読
八 の 日 (8・18・28)		質 問
九 の 日 (9・19・29)		会 読
十 の 日 (10・30)		講 積

「旧富山藩学制沿革取調要目」より作成



『詩経』(広徳館本)(五十島家文書)

広徳館 武芸 学習日程

	一 棟 (南之稽古所)		二 棟		三 棟	
	午 前	午 後	午 前	午 後	午 前	午 後
一 の 日	弓 術	民弥流居合	中条流劍術	高島流砲術	起倒流柔術	(伊藤幸左衛門派) 真揚流柔術
二 の 日	山口流劍術	白井流劍術	原田流劍術	高島流を除く古流砲術	(木村準之丞派) 柔術	(柚田元輔派) 柔術
三 の 日	改心流柔術	真場流柔術	山口流劍術	宝蔵院流槍術	(池崎屯派) 柔術	(須田彦三郎派) 柔術
四 の 日	弓 術	民弥流居合	中条流劍術	高島流砲術	起倒流柔術	(伊藤幸左衛門派) 真揚流柔術
五 の 日	山口流劍術	白井流劍術	原田流劍術	高島流を除く古流砲術	(木村準之丞派) 柔術	(柚田元輔派) 柔術
六 の 日	改心流柔術	真場流柔術	山口流劍術	宝蔵院流槍術	(池崎屯派) 柔術	(須田彦三郎派) 柔術
七 の 日	弓 術	民弥流居合	中条流劍術	高島流砲術	起倒流柔術	(伊藤幸左衛門派) 真揚流柔術
八 の 日	山口流劍術	白井流劍術	原田流劍術	高島流を除く古流砲術	(木村準之丞派) 柔術	(柚田元輔派) 柔術
九 の 日	改心流柔術	真場流柔術	山口流劍術	宝蔵院流槍術	(池崎屯派) 柔術	(須田彦三郎派) 柔術

「旧富山藩学制沿革取調要目」より作成

文化七年(一八一〇)、校舎が三ノ丸西の屋敷に移築されてからは、文武の稽古場が分離した。その後、四棟に分かれ、本館一棟は文学にあてられて漢学が講習され、他三棟は武芸の演習場となった。文学の教授は一月を三分し、それぞれ一日(一日・十一日・二十一日に当たる)から十日に割り振り、うち五日の日は休日で、三日・八の日の午後は質問日とされた。広徳館文学時間割振からも漢学の素読を徹底的に課されていることがわかる。

また、武芸は、弓術・居合・劔(劔)術・柔術・砲術・槍術が習練され、目録以上の実力が課せられた。こうした稽古は、更に身分によって細かく割り振られており、砲術については下士以上は広徳館構内において、足軽以下は千石町に設置された教練所において練習をした。藩士の中には高島流の大砲免許を与えられた者もいる。

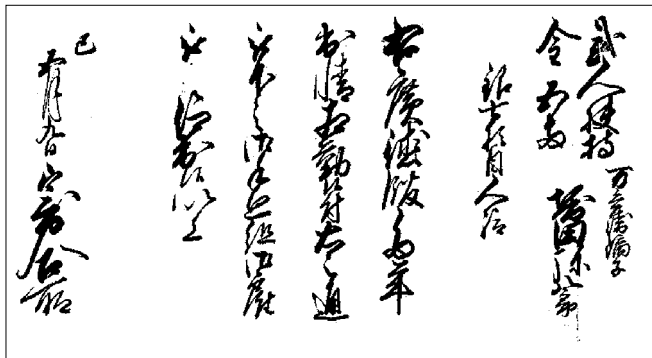


高島流大砲(=砲)免許状(半田家文書)

広徳館創設の目的は藩士の惰弱を矯正することであったから、定められた教育内容も、単に藩士に一般教養を施すためのものではなく、文武両道に未熟な者に対して一定の力を与えようとするものであった。それゆえ、広徳館への入塾は藩主の厳命で、藩士の子弟にとっては義務であった。

厳しい進級試験

慶応元年（一八六六）の広徳館規則によると、広徳館の教育方針は信賞必罰を旨として、文武ともに月二回、学校横目（学校職員）の立会いのもとで学校奉行による試験が行われた。文学では、四書素読を終えた者には抜読（一部分を指定して暗誦させる）をさせ、二字以内の誤りは合格、三字以上誤った者は不合格とされた。また、五経素読を終えた者にも抜読の試験をしたが、一字のみ誤りは合格、二字以上は不合格とするなど、進級試験は大変厳しかった。武芸は春と秋の二度進級試験が行われ、試合、表彰を師範が判定し進級を認定した。そして、進階を究め、「文学五経素読済 武芸目錄済之輩」は祭酒（儒官の最高位）などが詮議の上、就学年限の三年に満たずとも卒業を認められ、藩の役職に就くことが出来た。また格別優秀な者には、扶持が下賜された。



広徳館出精により手廻組御雇方につき奉書（堀田家文書）

但徠が開いた古学派の一つである。広徳館の設立当時は但徠学が主流となった。

しかし、寛政二年（一七九〇）に幕府が寛政異学の禁を出し、寛政三年に市河寛斎が儒官長となつてからは、昌平黌派が富山藩儒学の主たる学風となり、昌平坂学問所（昌平黌）出身の儒者が広徳館教育を担った。

出版事業

広徳館が開かれることが契機となり、藩に「版木方」が創設された。これにより、学問の普及と思想の統一を目的として出版事業が行われ、享和三年（一八〇三）出版の『曾子孝実』や慶応二年（一八六六）出版の『四書集註』・『五経』などを教科書として出版した。

これらを広徳館本という。富山藩が自前で出版したもので、『孟子集註』および『礼記』の末尾には「富山版木方」とある。藩の版木方古川亘衛と荻田永治によつて彫られたものであった。出版部数は延べ一万部にも及んだといわれ、真田善次郎という書林が鶴棲堂版として出版し、明治時代に入つても民間に広く流布した。

慶応二年出版の「四書集註」および「五経」は、昌平坂学問所（昌平黌）教授の佐藤一斎（一七七二〜一八五九）が訓点を付したものを参考とし、広徳館儒官の非凡山が校正して出版したものである。

また、富山藩主に関係した出版として以下の出版本がある。

・『東渠公詩集』（寛政二年（一七九〇））…六代藩主利興作の漢詩をまとめたもの

・『本草通串』（嘉永年間）…十代藩主利保による本草研究、九四卷五六冊

・『本草通串証図』（嘉永元年（一八四八）序）…『本草通串』の図版、五巻五冊

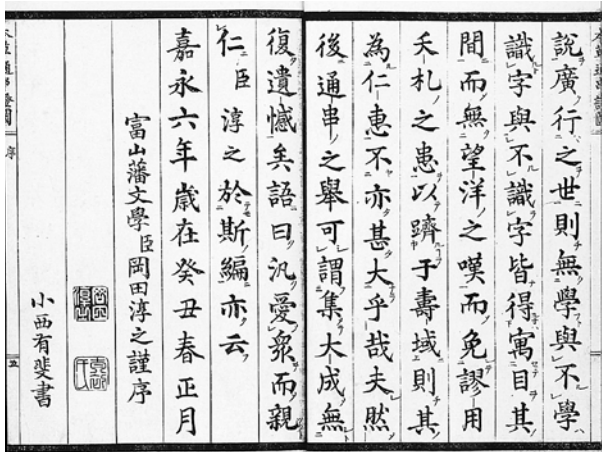
・『広徳館詩集』（全六冊）…広徳館の儒官たちの作詩集

学風と儒官

富山藩の学風は、初め京学朱子学派、ついで宝暦・安永（一七五一〜一八一）にかけては佐伯北溟・三浦瓶山らの徠徠学派であった。徠徠学派とは、荻生



『本草通串証図』(富山県立図書館蔵)



『本草通串証図』序
(富山県立図書館蔵)
富山藩文学であった岡田栗園(呉陽の養父)の序文。
小西有斐(呉陽の実父)の書による。

「プロム」 江戸時代のベストセラー

江戸時代は、太平の世が続く、教養や娯楽を求めて書籍への関心が高まり、紙の生産の増大や技術の進歩とあいまって、ベストセラー本が出現した時期でもある。江戸中期は、一千部も売れば大ベストセラーといわれ、井原西鶴の『好色一代男』や近松門左衛門の『曾根崎心中』などがその例である。江戸後期になると数千部に達するものもみられ、柳亭種彦の『修紫田舎源氏』^{にせむらさきいなかげんじ}は全三十八編それぞれが一万部以上売れたといわれている。

広徳館の廃止

明治元年(一八六八)九月、広徳館校舎が火災で焼失したが、民家を借りて継続された。生徒を上等生・下等生に分け、それぞれ塾舎を設けて教え、優秀な生徒は、東京・京都に派遣して、学業を修めさせた。

明治二年十月には英学教師森本弘策を招いて、別に変則英学校を創立(後、洋学北校と改称)して、寄宿通学の生徒を募った。

同年、広徳館の名を廃し藩学校と改称し、富山二番町に移して専ら漢学を学ばせた。さらに分校を総曲輪の民間の邸宅に設置して徳聚堂^{とくしゅうどう}と称し、皇学・漢学・洋学・数学を日課とし、一般町民の入学を許可した。これが富山藩において民間人を学校に就学させた初めである。また別に演武場(武術場)を富山山王町の民間の邸宅に移し、撃剣を学ばせた。一方、西洋医学学校を山王町に創立(後、洋学南校と改称)している。

明治四年七月、廃藩置県により諸学校が閉鎖されることになり、広徳館を中心とした藩校の制度は全て廃絶されることとなった。しかし、士族の渡瀬恒時・山田清純らは漢学を学ぶ場が無くなることを惜しんで、有志と協力し、共立義塾を設置することを県庁に請願し、認可を得た。

明治五年、学制が頒布され、翌六年に小学校が創設されるに至って、この義塾は当時開設された変則中学校へ合併されることとなり、まもなく変則中学校も廃止された。

私塾

家中の藩士を主な対象とした藩校と異なり、藩士をはじめ、町人・農民など広く庶民に開放した民間の教育機関として私塾をあげることができ、私塾での教育内容は、開設者（塾主）の独自の教育理念や方法によって、専門的な知識や特殊技能を伝授するというものであった。

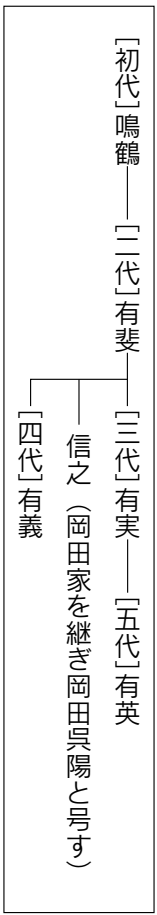
なお、一般に私塾という場合、漢学の教授を中心とする塾をさすが、今回の展示では算学などの塾も私塾の一種としてとりあげた。

主な私塾

①臨池居

明和三年（一七六六）、西三番町で開かれた。塾名の由来は、中国後漢時代の書家張芝が硯の水を自由に得られるようにと、池に臨んで家を構え、書に専念したので、墨で池の水が黒くなってしまったという故事にちなむものである。創始者の小西鳴鶴は、漢学や書道を中心に礼儀も教えた。以後、臨池居は鳴鶴の子の有斐・有実（？）一八八七）・有義（？）一八九五）・有英の五代にわたって継続された。有斐・有実・有義は広徳館の訓導等にも任ぜられており、特に有実は昌平坂学問所に学び、佐藤一斎・塩谷岩陰のもとで、漢学・篆刻・書道を修業している。

小西家の系図



臨池居跡(富山市三番町)

江戸中期からの商業の発達により、臨池居は当初の漢学塾の色彩がしだいにうすれ、天保年間（一八三〇～四四）になると、授業内容が寺子屋の性格の強いものになっていき、「小西屋」と呼ばれるようになった。臨池居の書流は当初は御家流であったが、のちに小西屋流と呼ばれる塾独特の書風を生み出した。また教授内容は他の寺子屋と同じく平仮名・名頭・千字文・諸往来等を教えたが、さらに薬名帳・調合薬附などの売薬に必要な文字や書信を加えるなど、多種多様であった。

「小西屋」の寺子屋教育は子供たちが志望する職業や生活に必要な知識や技能を、具体的に習得させる実学教育として高い評価を受け、最盛期の明治中期には約八〇〇人の子供たちが学んでいたといわれている。

明治五年（一八七二）の学制頒布で、旧来の教育機関が廃止されるなかにあつても、人々の要請により教育が続けられ、県の令達により教育内容を改めることで、明治三十二年の富山大火によって建物が焼失するまで継続された。



小西伯叔両先生遺徳碑(富山市於保多神社)

「フム」薬の効能書も書いていた小西屋

売薬業で知られる中田家や蜜田家に残った資料の中に薬の効能書がある。その版木をつくるにあたって、その下書きを寺子屋の先生である小西屋の人々に依頼したのである。



商標合紋試刷(富山市郷土博物館蔵)

②学聚舎

藩医であり、広徳館訓導でもあった岡田栗園（二七八六〜一八六四）が、文化二年（一八〇五）に始めた私塾。栗園は広徳館の職務のかたわらこの学聚舎で漢学を教えていた。栗園のあと、小西家から養子に入った呉陽（一八二五〜八五）が継いだ。広徳館が廃せられて以後は、呉陽はこの家塾に力を注いだ。明治五年の学制頒布により藩校・私塾が廃止される中で、臨池居と学聚舎は存続し、教育が続けられた。

③修三堂

高岡町の町年寄であった富田徳風（横町屋九代目弥三右衛門美宏）（一七六六〜一八一七）が中心となって文化三年（一八〇六）に開かれた。設置場所は、影無坂（高岡市末広町）である。

修三堂の名称は、『易経』（繫辞下伝）の「君子はその身を安んじて而して後に動き、其の心を易めて而して後に語り、其の交を定めて而して後に求む。君子は此三者を修む。故に全し。」から引用されている。また堂の題字は、富田徳風の師である京都の皆川淇園が書いている。



修三堂跡（高岡市末広町）

五月三日に開講式が行われ、当時金沢を訪れていた海保青陵が招かれて『論語』学而篇を講義した。また、二年後の文化五年には手島堵庵（石田梅岩の弟子）の門人脇坂義堂（？〜一八一八）を招き、専ら心学を講じている。

修三堂の堂則として、わずか三条の規則を定めたが、その一に「盟外の面々たりとも、いづれの先生を招請し、此堂へ来会せんとならば、随分御かし申すべし。附、席料等かたく不納、聊も懸念する勿れ。」と広く門戸を開放し、

局外者でも学びたい人には無料でその堂舎を貸すとしている。

富田徳風は文化十四年に亡くなったが、その後は茶木屋右衛門が主宰した。

この修三堂へ、同志が持ち寄った高岡古来の孝子節婦等の善行美談を、平易な文章で集録したものに「修三堂湯話（高岡湯話）」がある。代表的な話として、動地六兵衛の話がある。



孝子六兵衛の碑（高岡市末広町）

④敬業堂

高岡町奉行の大橋作之進（？〜一八五九）が文政八年（一八二五）に開いた。場所は関野神社前（高岡市末広町）で、詩亭養老軒を改築したものである。富山藩の儒臣小塚南郊を招いて講師とし、孝経（孝道について説いた経書）を講じた。

大橋は文政四年（一八二二）から十八年もの長い間、町奉行を務めた。天保九年（一八三八）七月、彼が町奉行を辞して高岡を去ったのち、次第に衰えた。なお、大橋作之進はのちに西洋砲術の私塾を開いており、これが加賀藩壮猶館の設立につながっている。

⑤正義堂

明治元年（一八六八）、菊池復堂（二八三〇〜九七）・吉田琴堂（一八五二〜八九）によって戸出に設立された。

設立の趣旨は、「旧習の困弊を洗除し新奇の軽薄に汚染せず、既往将来の形勢を考究し、相俱に実着に切磋するを専要とすべき」ことにあつた。

塾則では「其義を正し其利を謀らず、其道を明らかにし、其功を計らず」と掲げ、また有為な青年には貴賤、長幼を問わず、学問の道をつけた。

⑥ 栖霞園

嘉永六年（一八五三）、福光の有志たちにより福光城址に設立された。その講師として儒者宮永菽園（一七九五～一八六七）を迎えられ、多くの門人に四書五経などを研究する経学を講じ、詩文を教授した。この薫陶感化をうけて、福光町の一般庶民の間にも作詩が広まり、詩文をよくする人々が輩出した。後年、加賀藩の漢学者であり史家としても名高い小州石埼謙（砺波市小島出身）が「菽園先生のおかげで福光辺では一般民家の者までが唐本（漢文の書物）ぐらいいは読む」といつて賛嘆したと伝えられている。また弟の虞臣（半仏道人）（一七九八～一八五五）もともに弟子の訓育にあたっていて、後年その作品集として『半仏先生遺稿』が刊行されている。

明治二年、栖霞園を前身とする郷学所が福光の有志により設立された。



宮永菽園墓(小矢部市下川崎)



栖霞園跡(南砺市福光荒町)

主な私塾一覧（『富山県の教育史』より）

塾名	地域	開設時期	西暦	開設者
臨池居 (塾名なし)	富山	明和3年	1766	小西鳴鶴
学聚舎	富山	安永8年	1779	中田高寛
修三堂	富山	文化2年	1805	岡田淳之
安乗寺講堂	高岡	文化3年	1806	富田徳風
敬業堂	高岡	文化11年	1814	長崎蓬州・栗田佐久間
(塾名なし)	高岡	文政8年	1825	大橋作之進成之
申義堂	魚津	文政10年	1827	荒尾作左衛門
(塾名なし)	今石動	文政年中		上田作之丞
(塾名なし)	舟見	天保10年	1839	脇坂長蔵
(塾名なし)	黒部	天保年中		福沢政次
梅之舎 (塾名なし)	氷見	安政6年	1859	大森定久
桑亭	魚津	安政年中		馬場三郎
牛馬堂	高岡	弘化初年		上田作之丞
栖霞園	高岡	弘化年中		山本道斎
混放堂 (塾名なし)	福光	嘉永6年	1853	福光村有志(宮永菽園)
(塾名なし)	般若野	安政3年	1856	河合平三
(塾名なし)	魚津	安政年中		五島宗八
(塾名なし)	東五位	安政年中		五十嵐篤好
(塾名なし)	魚津	文久元年	1861	阿波加修造
(塾名なし)	魚津	万延年中		飯野正映
(塾名なし)	高岡	不明		井上七左衛門
(塾名なし)	新湊	不明		石黒信由
(塾名なし)	小杉	不明		石川乾山
高岡学館	高岡	不明		土肥隼之助
正義堂	戸出	明治元年	1868	菊池復堂・吉田琴堂
杉木教学所	砺波	明治2年	1869	御扶持人十村一同
共立義塾	富山	明治5年	1872	渡瀬恒時
待賢堂	高岡	明治5年	1872	野上文山

上記のほか、広徳館儒官による家塾が多数ある。

⑦ 中田塾

関流算学家の中田高寛（一七三九～一八〇二）が、安永八年（一七七九）に富山桃井町に開いた算学塾。中田高寛は、幼時から算学を好み、広瀬吉兵衛や松本武太夫らに学んだ。明和五年（一七六八）、求めによって『算学訓蒙』を著している。安永二年（一七七三）、六代藩主利興が江戸参勤に高寛を伴い、山路主任（関流の直系三伝）に従学させている。同六年の主任没後は、その子の之徴に師事した。安永八年に帰藩し、塾を開いた。これが越中における関流算学の嚆矢である。門人は、越中国内はもとより、大聖寺・飛騨高山、遠く伊勢にも及んだ。代表的な門人に、石黒信由や高木広当らがいる。



中田高寛碑(富山市 極楽寺)

寺子屋

富山県内の寺子屋は、調査にもよるが、多いもので五百余もの存在が教えられている。そのうち、記録等により開業年代がわかるものは一五八である。開業の年代をみると、文化・文政以後に著しく普及している。

庶民を主体とした近世の寺子屋が発生・普及した背景として、商業活動の活発化があげられる。諸種の帳簿の記帳、契約、書簡の往復などが不可欠の作業となり、農民、職人といえども日常生活において文字が必要となったからである。

寺子屋教育は「読み・書き・そろばん」の実務教育が中心であり、最も重んぜられたのは習字であった。読書はそれに付帯して教材の暗誦という形で教えられた。また、手習の過程において、書く姿勢・態度、礼儀作法やしつけ、さらには手習う教材の内容から教訓も学びとっていった。手習いは知識教育であり道徳教育でもあった。寺子屋で用いられる習字用、読本用の教科書を総称して、「往来物」と呼んでいる。名頭、村名付、国尽、商売往来、消息往来、諸職往来、今川状など多種多様で、地方の事情と師匠の意図によって使う教科書が決められた。それを利用することにより、実生活に必要な最小限度の知識を学び取るものであった。これらの教科書をもとに師匠が手書きで手本を作成し、それを与えて字を練習させた。師匠あるいは優等の弟子が指導し、師匠は個々の学習進行状況を把握して課題を与えた。

北陸三県の寺子屋での学習内容（読・書・算）を比較すると、富山では他の二県に比べ、算の実施率が著しく高い。この点で、越中の寺子屋ではそろばんを主とした計数をいかに重要視していたかということが分かる。富山町では主産業である売葉業を考慮して、葉名帳・調合葉付が往来物とともに教本として用いられており、寺子屋教育はまさに生活教育そのものであった。

寺子屋に入る子供たちは、農村と都市では若干異なるが、おおよそ七歳から十四歳の年齢であった。

また師匠は、一般的には僧侶・神官・浪人が多く、農村においては十村や肝煎などの有力農民がなつた。しかし越中における寺子屋の師匠の身分については、全国的に見て医者や僧侶の比率が低く、有力農民や有力商人といたった庶民層の比率が非常に高い。

当時の寺子は自由に師匠を選ぶことができた。寺子の師匠を選ぶ観点は、施設・設備ではなく、師匠の人格・人望、あるいは文字の筆法にあった。

筆塚・頌徳碑

寺子屋で学ぶ子供たちは、八、九歳の育ち盛りから数年間を、ただ一人の師匠に学び、読・書・算を授けられ、人格形成にも大きな感化をうけたのである。その結果、深い師弟愛によって結ばれることが多かった。こうした寺子屋の師匠と弟子との関係を跡づけるものとして、学徳をしのんで建てられた「筆塚」や「頌徳碑」があげられる。これらの碑は、その地域で寺子屋教育が行われたことを示す重要資料となっている。

今回の筆塚・頌徳碑の一覧は各市町村史を参考に、学制頒布以前に寺子屋教育に活躍した人物に関するものを列記した。



「加越能三州往来」(五十島家文書)

筆塚・頌徳碑一覧

通番	碑文	人物	生没年	建碑年	筆塚・頌徳碑の所在地	参考文献
1	「釋演暢師墓」	一瓢(演暢)	?~1837		入善町舟見 念興寺	『入善町誌』p854●
2	「南無阿弥陀佛 筆塚」	道増源兵衛	?~明治初年	1876	入善町道古 川瀬病院(入善町東狐)の東	『入善町誌』p859・p862●
3	「明教院釋僧銘慶叟」	雪山僧銘	1723~1783	1841	宇奈月町浦山 善巧寺(空華窟)	『宇奈月町史』p681・p682●
4	「南無阿弥陀佛」	山原松兵衛	?~1877	1883	黒部市荻生 称名寺門前	『黒部市誌』p733●、『富山県教育史』p93
5	「□学記念碑」	花崗天龍	?		上市町黒川 黒川尋常小学校跡	『上市町誌』p671●
6		堀 清平	1853~1899	1900	上市町天神町	『上市町誌』p672●
7	「上市寺子屋由来」	上市寺子屋由来の碑		1944	上市町南町 常福寺境内	『上市町誌』p611●
8		広田文城			上市町	『上市町誌』p672●
9	「南無阿弥陀佛」	郷田繁治	1846~1867	1896	上市町稗田	『上市町誌』p672●
10	「いろは唯因法」	増田与三左衛門	?~1863	1863	上市町横越 神明社境内	『上市町誌』p676●
11	「□□□」	高峰守齊	1837~1905	1884	上市町箱 白岩川畔	『上市町誌』p671●
12		結城豊次	1778~?		上市町(旧新川東部小学校跡前)	『上市町誌』p675●
13	「記念碑」	稲田六三郎	1810~1884	1888	舟橋村竹内	『舟橋村誌』p86●・p90
14	「書教先鐸 竹瀬與四郎誌」	竹瀬與四郎		1898	舟橋村竹鼻	『舟橋村誌』p87●
15		日水芳邦			立山町塚越	『立山町史』下巻p882●
16		松井次郎右衛門(温山)			立山町(稚児塚)	『立山町史』下巻p880●
17	「玉鼎斎翁之碑」	藤田謹之新(玉鼎斎)		1878	立山町利田曾我	『立山町史』下巻p883●
18		白井関兵衛			立山町日中	『立山町史』下巻p884●
19	「廣□筆塚」	窪美養鼎・昌保・滝治?		1882	立山町東野	『立山町史』下巻p881●
20		松尾甚兵衛			立山町四谷尾	『立山町史』下巻p882●
21	「参光碑」	西田作平	?~1886		立山町上中 願船寺	『立山町史』下巻p884●
22	「筆塚」	吉田貞斎			立山町沢端	『立山町史』下巻p880●
23	「廣山筆塚」	平井重右衛門			立山町江崎 江崎交差点	『立山町史』下巻p881●
24	「一茶翁」	村崎勇三(一茶)			立山町沢新 神明社境内	『立山町史』下巻p881●
25	「林彌五平塚」	林弥五平		1885	立山町中米沢	『立山町史』下巻p882●
26	「寶□耕筆墨 酒井周斎碑」	酒井周斎	?~1887		立山町五百石 天満宮	(『立山町史』下巻p881・p883)・明神著
27	「野島先生塚」	野島周蔵		1865	立山町道新	『立山町史』下巻p883●
28	「北村梅坡先生之碑 真正覺」	北村伝吉(梅坡)(11代)	1833~1908	1890	立山町西大森 地藏堂横	『立山町史』下巻p885●
29	「中郷主一翁先生碑」	中郷主一			立山町野村	『立山町史』下巻p1575●
30	「筆魂祠」	佐伯岩見		1870	立山町岩嶽寺 雄山神社鳥居前	『立山町史』下巻p880●
31	「梅野一昌先生 筆塚」	梅野一昌	1804~	1881	富山市四方 四方公民館前	『四方郷土史話』p293●
32	「□□山田翁碑」	山田秀平			富山市新庄町 新川神社境内	『新庄町史』p300●
33		盛田波及			富山市新庄新町	『新庄町史』p300●
34	「頌徳碑 笹岡季隆 笹岡久豊 両大人之碑」	笹岡季隆・久豊		1909	富山市月岡町 切掛松下	『月岡郷土史』p378●
35	「田中可成塚」	田中平左衛門可成	1768~1839	1899	富山市中老田	『中老田郷土史』p35●・p161
36	「眞野成次塚」	眞野次右衛門成次	1793~1877	1878	富山市中老田	『中老田郷土史』p35●・p162
37	「四津谷彦十郎碑」	四津谷彦十郎	1824~1890	1894	富山市新保 新川公民館前	明神博幸『越中国の教育史』
38	「武部玄成 筆塚」	武部玄成	1784~1867	1892	婦中町下条 光善寺境内	『婦中町史』p1181●
39	「若松周仙塚」	若松周仙		1859	婦中町羽根	『婦中町史』p1182●
40	「頌徳碑」	巧雲		1908	婦中町広田 万芸寺	『婦中町史』p1181●
41	「勸学大善院釈芳流師」	龍沢芳流	1813~1904	1893	婦中町上井沢 西念寺	『婦中町史』p1181●
42	「広吉庵即水先生 筆塚」	織田是空(即水)	1823~	1874	婦中町小倉 春日社境内	『婦中町史』p1180●
43	「住吉遠山翁碑」	住吉遠山		1926	細入村楡原	『細入村史』通史編p347●
44	「李唐先生墓」	李唐(井波町靴屋源右衛門)		1801	八尾町上新町(寺山)	『八尾町史』p511●
45	「池田三朗翁頌徳碑」	池田三朗(小倉屋宗三郎)			八尾町 城ヶ山公園内	(『八尾町史』p512)・明神著
46	「南無阿彌陀佛」	瀧野諦龍	1832~1911	1893	山田村白井谷 康楽寺下	『山田村史』上巻p528
47		山田八郎平	1826~1892	1890	山田村	『山田村史』上巻p527
48		(専念寺)		1873	新湊市本町 専念寺	明神博幸『越中国の教育史』
49	「北園先生之碑」	広瀬太郎左衛門信道(北園)	1798~1852	1878	下村加茂中部 JAいみず野低温倉庫前	(『下村史』p723)・明神著
50	「関原直入翁碑」	関原総兵衛(九郎平)直入		1901	下村加茂中部 萩野自動車工業向かい	『下村史』(p722)p725
51	「頌徳碑」	島倉久次郎		1925	小杉町西高木 西高木コミュニティセンター前	『小杉町のいしぶみ』第3集p59●
52	「瘞筆塚 山田托渡先生」	山田托渡		1824	小杉町戸破(北手崎)	新『小杉町史』通史編p620●
53	「金森暁山先生碑」	金森暁山		1920	小杉町戸破(中町) 日澄寺西側	旧『小杉町史』後編p123●
54	「瘞筆塚 若林花山先生」	若林六左衛門(花山)		1872	小杉町三ヶ(水源町) 小杉高校東側	『小杉町のいしぶみ』第1集p57●
55		水上弥三郎(北葉)		不明	小杉町三ヶ(水源町) 小杉高校西側	新『小杉町史』通史編p620●
56	「松本先生之塚」	松本泰三		1885	小杉町山本新 春日社の南側高台	旧『小杉町史』後編p123● ・新『小杉町史』通史編p804●
57		寺本吉二		1885	大門町布目沢	『大門町史』p694
58	「活筆走龍蛇」	加藤作右衛門		1887	大門町荒町 光源寺前	『大門町史』p694
59	「宮川直通先生碑」	宮川直通		1908	大門町串田 櫛田神社	『大門町史』p694
60	「廣澤周齋翁碑」	広沢周斎	1816~1894	1894	氷見市姿	旧『氷見市史』p426● ・『氷見教育百年史』p17●
61		高野元禮			氷見市宇波	『氷見教育百年史』p21●
62	「秀了翁□」	屋敷秀了	1813~1870		氷見市阿尾	『氷見教育百年史』p15●

筆塚・頌徳碑一覧

通番	碑文	人物	生没年	建碑年	筆塚・頌徳碑の所在地	参考文献
63		糸(和泉屋)六兵衛文介	1775~1853		水見市北大町 八幡神社前	『水見教育百年史』p6●
64		朝日屋又三郎		1866	水見市幸町 千手寺	『富山県史』通史編IV近世下p695● ・『水見教育百年史』p8●
65		長沢六良兵衛			水見市朝日本町 上日寺境内	『富山県教育史』p93●
66	「吉井□□□□」	吉井次郎右衛門(三恕)			水見市朝日本町 上日寺境内	『水見教育百年史』p6●
67		宮永善左衛門叔與	安政~明治初		水見市朝日本町 上日寺境内	『水見教育百年史』p7●
68		有坂兵九郎	安政~明治初		水見市床鍋	『水見教育百年史』p9●
69		織田雪象	1786~1841	1842	高岡市石堤 長光寺境内	明神博幸『越中国の教育史』
70	(歌碑)	石川友二効明	1817~1886	1881	高岡市戸出 戸出野神社第一鳥居北側	『戸出町史』(p1067)p1437●
71	「南無阿弥陀佛 筆塚」	丸山彦十郎		1887	小矢部市岩崎	『小矢部のいしぶみ』第15集p11●
72	「南無阿弥陀佛」	大野八兵衛		1856	小矢部市千石	『小矢部のいしぶみ』第4集p37●
73	「懷徳碑」	砂田有信	1859~1929	1918	小矢部市石名田 石名田公民館脇	『小矢部市史』下巻p281●
74	「南無阿弥陀佛」	日光孫兵衛		1899	小矢部市芹川 清月寺前	『小矢部のいしぶみ』第12集p6●
75	(七言絶句)	松波喜平		1876	小矢部市西福町 神明宮(福町)境内	『小矢部のいしぶみ』第1集p65●
76	「故榊原満都廼之碑」	榊原満都廼	1847~1894	1894	小矢部市八和町 永伝寺境内	『小矢部市史』下巻p281●
77	「筆塚」	高瀬五左衛門親正		1876	小矢部市観音寺町 観音寺境内	『小矢部市史』下巻p281●
78	「定久高瀬君之碑」	高瀬彌六左衛門定久	1796~1841	1846	小矢部市後谷	『小矢部のいしぶみ』第2集p84●
79	「南無阿弥陀佛」	長澤良庵		1879	小矢部市金屋本江	『小矢部のいしぶみ』第10集p13●
80	「南無阿弥陀佛」	住田尚斎		1861	小矢部市和沢 和沢神社	『小矢部市史』下巻p282●
81	「南無阿弥陀佛」	住田周斎		1887	小矢部市和沢 和沢神社	『小矢部市史』下巻p282●
82	「南無阿彌陀佛」	加茂青翠	1829~1906	1867	小矢部市水島	『小矢部のいしぶみ』第6集p15●
83	「南無阿彌陀佛 加茂澤水塚」	加茂庄左衛門(青州)(澤水)	1809~1847	1848	小矢部市水島 勝満寺門前の個人宅横	『小矢部のいしぶみ』第6集p14●
84	「南無阿彌陀佛」	沼田直次郎	1843~1901	1880	小矢部市水島 和泉集会场前	『小矢部のいしぶみ』第6集p15●
85	「篠岡貞次翁之碑」	篠岡貞次	1854~1925	1918	小矢部市水島	『小矢部のいしぶみ』第6集p10●
86	「川口先生碑」	川口斎孝		1913	小矢部市五郎丸 蟹谷橋詰	『小矢部のいしぶみ』第5集p17●
87	「高風物什 釋靈純州・釋慈雲州碑」	靈純・慈雲		1897	小矢部市興法寺 浄教寺山門前	『小矢部市史』下巻p284●
88	「西脇興頭教師昭徳碑」	西脇興頭		1886	砺波市福岡 嚴照寺境内	『中田町誌』p539●・『砺波市の石碑』p31
89	「寺子屋善永先生之碑」	善永		1882	砺波市頼成 西慶寺	『砺波市の石碑』p29
90		齊藤宗庵		1918	砺波市柳瀬	『砺波市の石碑』p26
91	「招喚坊雄公之碑」	平野玄照	1827~1894	1863	砺波市太田 専念寺境内	『砺波市の石碑』p27
92		宗八			砺波市大門 正行寺裏	『砺波市の石碑』p12
93		小倉孫左衛門		1843	砺波市鷹栖16区(不動島)	『砺波市の石碑』p20
94	「南無阿弥陀佛」	川田七四郎			砺波市新明	明神博幸『越中国の教育史』
95		清原庄兵衛			砺波市新明	『砺波市の石碑』p13
96	「水上理平翁碑」	水上理平	1810~1885	1900	砺波市中野 中野神社前	『砺波市の石碑』p13
97	「正心明」	藤井四右衛門		1879	砺波市中野	『砺波市の石碑』p14
98		余西佐久平		1878	砺波市五郎丸	『富山県教育史』p93
99	「南無阿弥陀佛」	宮崎小左衛門	1809~	1864	砺波市鹿島	『砺波市の石碑』p16
100	「南無阿弥陀佛」	水野達治	1853~1908	1900	砺波市鹿島	『砺波市の石碑』p16
101		河合三介		1876	砺波市野村島	『砺波市の石碑』p17
102		桃井光玄(義徳、皇元)		1887	砺波市野村島	『砺波市の石碑』p17
103	「南無阿弥陀佛」	小幡増右衛門		1870	砺波市荒屋 荒屋交差点ヒバ地藏堂横	『砺波市の石碑』p16
104		柏樹三郎右衛門(壽山義運)	1804~1895	1879	砺波市荒屋	『砺波市の石碑』p16
105	「筆塚」	藤井秀直・幸磨父子			庄川町庄	『庄川町史』下巻p486●
106	「業精干□」	齊藤治兵衛(暁臺)		1852	庄川町青島 庄川中学校グランド	『庄川町史』下巻p485●
107	「行成於思」	齊藤庸志(暁峰)	1833~1912	1893	庄川町青島 庄川中学校グランド	『庄川町史』下巻p485●
108	「沖田兵吉之碑」	沖田兵吉		1894	庄川町青島 庄川中学校グランド	『庄川町史』下巻p485●
109		高桑師道			庄川町金屋 光照寺付近	『庄川町史』下巻p485●
110	「徳不孤」	森田助七			庄川町金屋	『庄川町史』下巻p486●
111	「書筆博藝」	坪野屋(岩倉)仁兵衛		1872	井波町北川 北川神明社境内南横	『井波町史』上巻p958●
112	「以義達道」	宇野甚之助(塩屋)		1872	井波町井波 井波八幡宮境内	『井波町史』上巻p957●
113		箭原伊兵衛(5代目)		1889	井波町今里 今里神明宮境内	『井波町史』上巻p958
114	「南無阿弥陀佛」	亀田三郎右衛門(15代)	1821~1887	1888	井波町連代寺 矢於留神社境内	『井波町史』上巻p957
115	「南無阿弥陀佛」	新井伊左衛門	?~1887	1893	福野町高儀 高儀(北)交差点附近	『福野町史』p451●
116		河合増林(寶林)	?~1874	1877	福野町野尻 等覚寺境内	『福野町のいしぶみ』第2集(中部・北部)p31●
117	「雙美之碑」	福富与太郎・勝太郎		1895	福野町福野 恩光寺境内	『福野町のいしぶみ』第2集(中部・北部)p18●
118	「南無阿弥陀佛」	河邊次郎左衛門光正	1826~1881	不明	福野町島 交差点北側	『福野町史』p450・『福野町のいしぶみ』第3集(東部・高瀬地区)p35●
119	「歌碑(側面 古瀬八代主佐兵衛塚)」	(八代)古瀬佐兵衛		1879	福野町上川崎 高参寺門前	『福野町史』p451●
120	「片山遊亭筆塚」	片山遊亭(江田屋重助)	?~1866	1867	福光町坂本山墓地の登り口	『福光町史』下巻p715
121	「庄助塚」	氏家庄助		1857	福光町坂本山墓地の登り口	『福光町史』下巻p716
122	「庵芳運師碑」	庵芳運		1923	福光町祖谷 本敬寺向かい	『福光町史』下巻p719●
123	「堀川雪郷筆塚」	津幡屋良平			城端町野下 水月寺北側	『城端町史』p932

※所在地の市町村名は平成の合併前の名称で表記。参考文献欄の●は各文献に写真を掲載。

県内の主な筆塚・頌徳碑の写真



②道増源兵衛



⑩増田与三左衛門



②⑥酒井周斉



③⑥眞野成次



④③住吉遠山



④⑥瀧野諦龍



⑤⑩関原直入



⑤⑧加藤作右衛門



⑥②屋敷秀了



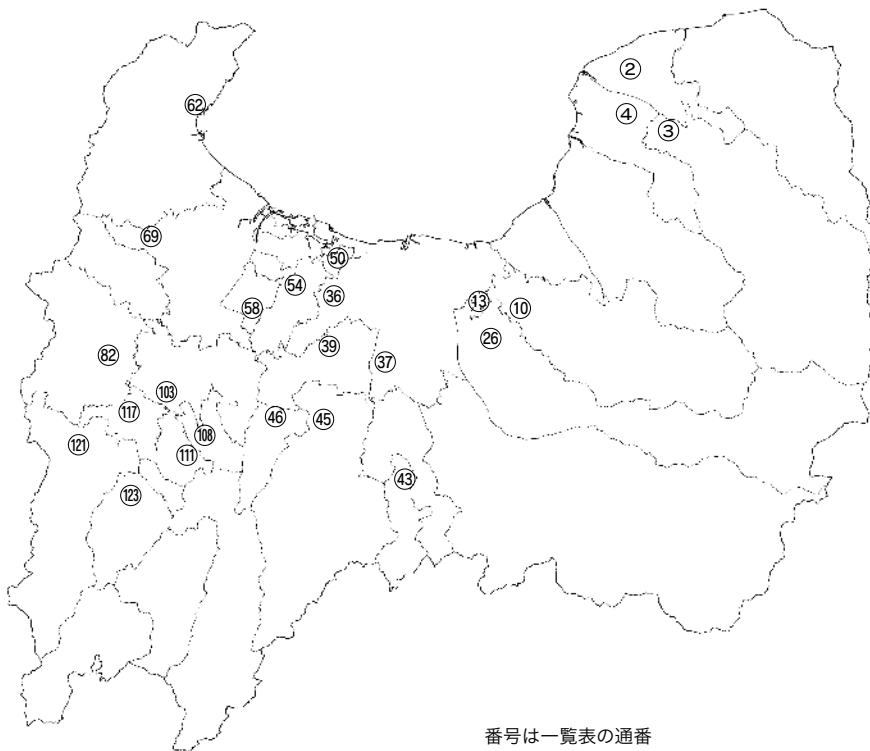
⑧②加茂青翠



⑩③小幡増右衛門



⑪②氏家庄助



番号は一覧表の通番

岡田呉陽とその弟子

岡田呉陽は、広徳館の文学や藩主師範をつとめるとともに、家塾「学聚舎」で多くの若者を育てた儒学者である。著名な啓蒙思想家や漢学者、書家のちのジャーナリストなど一流の文化人たちと交流した。そして、呉陽の教えを受けた弟子たちは、言論や政治、教育、文化など多方面にわたって活躍しており、郷土富山県のみならず、明治期の日本社会の発展に少なからず影響を与えた人物である。

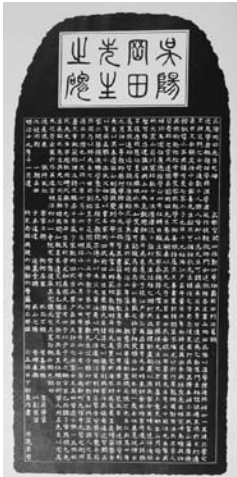
岡田呉陽とは (一八二五〜八五)



家塾臨池居を営んでいた小西有斐の次男で、岡田栗園の養子となった。十九歳で昌平坂学問所に学び、三年後に帰藩して嘉永六年(一八五三)広徳館学正、明治元年(一八六八)、広徳館文学・藩主師範となる。藩政の刷新に意見し、功績があった。養父栗園が設立した家塾「学聚舎」を継ぎ、明治五年、変則中学校の設立に尽力し、明治十年には富山師範学校教諭となるなど、明治以降も引き続き教育に力を注いだ。

呉陽をめぐる人々

呉陽の次男である岡田正之が父呉陽の作品を編纂した『呉陽遺稿』という和綴本がある。この遺稿の付録として呉陽への追悼の詩・文章が収録されているが、追悼詩文を載せた人々の中には次のような著名人がいる。



呉陽岡田先生之碑
『呉陽遺稿』(富山県立図書館蔵)

・中村正直(敬字)(一八三二〜九二)

昌平坂学問所で学ぶ。森有礼・福沢諭吉らとともに明六社を結成。主要メンバーとして啓蒙思想の普及に努めた。スマイルズの著書『西国立志編』、ミルの著書『自由之理』を翻訳・刊行したことで知られる。

・藤野正啓(海南)(一八二六〜八八)

明治時代の漢学者、歴史家。伊予松山藩士。昌平坂学問所で学ぶ。維新後は修史局編修官をつとめ、呉陽の碑文の撰文を行った。

・日下部東作(鳴鶴)(一八三八〜一九二二)

小林梧竹、巖谷一六とともに明治の三筆と呼ばれる近代書道の確立者の一人。呉陽の碑文を揮毫した。

・山田長宣(新川)(一八二七〜一九〇五)

江戸後期から明治時代の漢詩人。新川郡上市村(現上市町)で漢方医をしていた山田玄隆の長男として生まれる。詩作に専念し、加賀藩の藩校明倫堂で教える。

・西村時彦(天囚)(一八六五〜一九二四)

漢学者、新聞記者。大阪朝日新聞の主筆で、コラム「天声人語」の名付け親。大阪の漢学塾懷徳堂の再建にも尽力した。

呉陽の弟子たち

①海内果(一八五〇〜八二)



加賀藩領射水郡中老田村の村肝煎の家に生まれ、富山の岡田呉陽に漢学を学ぶ。明治九年(一八七六)、東京日日新聞の社主福地源一郎より社説欄の執筆を依頼され、上京し、主筆となる。岸田吟香・久保田寛一らと並ぶ記者となる。地租改正批判、西南戦争論、小学校教育改正など全国

的問題とともに、伏木開港論など地方の問題も取り上げ、言論界の彗星的存在

在となった。明治十年（一八七七）に小杉町で相益社を結成し、『明六雑誌』を範として『相益社談』を出した。また、明治十四年（一八八一）年には高岡の大橋十右衛門らと越中義塾を開設した。不幸にして三十二歳で夭折したが、その志は自由民権家の稲垣示、島田孝之らに受け継がれた。芳名録等によれば、東京日日新聞の日報社に所属していたころ、伊藤博文、井上毅、大隈重信、岩崎弥太郎、安田善次郎ら政財界人と知り合っている。

コラム 果と伊藤博文 ～墨汁事件～

工部卿の伊藤博文が福地を訪ねた折り、茶目つ気の多い博文がいたずら半分は執筆中の果の背後から筆を押さえて戯れた。頭にきた果は、とつさに墨汁を博文の顔にぶっかけた。さすがの博文も嘩然として苦笑いしたという。果と博文との親しさがわかるエピソードである。また、果は、木戸孝允の要請で、明治新政府の国策「地租改正案」の骨子をつくっている。重杉俊雄『郷土の先覚 海内果』



② 米沢紋三郎（一八五七～一九二九）

富山県の分県功労者。新川郡入膳村（現入善町）の豪農の家に生まれ、富山の岡田呉陽に学ぶ。明治十四年（一八八一）、石川県会議員に当選し、越中自治党を結成（翌年、越中改進黨と改称）した。同年夏、分県建白の委員長に挙げられ、岩倉具視右大臣、山県有朋参議、山田顕義内務卿を歴訪して分県を陳情するなど尽力し、同十六年（一八八三）五月、富山県の独立を実現した。その後、富山県会議員、第三代県会議長、衆議院議員を歴任し、立憲政友会に所属するなど富山県を代表する政治家となる。

③ 若林快雪（一八四三～一九二二）

書家。名は常猛。富山藩士若林宇兵衛の次男として生まれ、富山藩儒の岡田呉陽に書と漢籍を学ぶ。その後、日下部鳴鶴に師事し、その高弟の一人となった。新川郡大久保村（現富山市）の小学校長や、富山県師範学校の書道教諭をつとめた後、明治十九年（一八八六）大阪府師範学校教諭に、同二十一年には華族女学校教授に任ぜられた。同三十九年、岩崎小弥太（三菱財閥の四代目総帥）に招聘され美術顧問を務めている。

④ 田村惟昌（一八五六～一九二六）

新川郡経田村（現魚津市）に生まれ、富山の小西有義や岡田呉陽の塾で和漢を学ぶ。明治十六年（一八八三）富山県会議員に選ばれ、のちに副議長・衆議院議員・生地町（現黒部市）町長を歴任した。同三十三年（一九〇〇）、『富山日報』社長に就任。大正七年（一九一八）の米騒動の時には寺内閣弾劾の社説を載せ、引責辞任を迫っている。



⑤ 上埜安太郎（一八六五～一九三九）

砺波郡上向田村（現高岡市）の豪農の家に生まれ、石動の申義小学校を経て、富山の岡田呉陽に学ぶ。明治三十一年（一八九八）、第十二代富山県会議長に就任。議長在任中の県立第三中学校新設が政治問題化した際、公正な態度で対応したエピソードは有名。明治三十五年（一九〇二）の衆議院議員選挙に当選して以来、連続十回当選し、立憲政友会の長者的存在となる。

おわりに

近世の教育の様子を見ていくと、基礎教育を大切にしていることが分かる。藩校および私塾であれば漢籍の素読を、寺子屋であれば「読み・書き・そろばん」という具合に、基礎の習得を重視している。

広徳館における教育の内容を見ていくと、武士としての素養の一つとしてまず四書五経の素読を徹底的に習得させている。暗誦できるようになつてはじめて、内容の理解・解釈へと進んでいった。四書五経の内容は難解なものであり、それが基礎であるということに驚かざるを得ないが、当時の武士たちにとっては欠かせない学問であつた。だからこそ、進級試験にみられたようにわずかな誤りでも不合格とされたのであろう。教育の成否が藩の発展に影響を与える時代とはいえ、優秀な成績を収めた者は出世の可能性が増え、一方で不十分なものは御役御免などという厳しい措置がとられている。

前田利保による『本草通串』に代表される富山藩の本草学も、漢学の基礎の上に成立したのである。四書五経と本草学とは一見つながりがないように思われるであろうが、本草学の文献は漢文が主であり、漢学の素養がないとその理解は不可能となる。この事実は、応用におよぶ以前に基礎的教養を習得することの大切さを示している。明治の各界で活躍する人物を多く育てた教育者、岡田呉陽も何よりも基礎的な学問を重視している。このような基礎教育があつてはじめて、近代日本の発展があつたのではないだろうか。

また、私塾や寺子屋における教育においては、師匠と弟子との間に濃密な人間関係が感じられる。師匠は弟子たち個々人の修得の様子を見ながら、学問ばかりでなく人格面においても優れた人物に成長していくよう熱心に指導にあたる。その思いが弟子たちに伝わり、弟子たちは師匠の学徳をしのんで筆塚や頌徳碑を建てるのである。県内各地に筆塚・頌徳碑が多く残されている。これらの碑は各地域においてこのような教育活動があつたことや、師匠と弟子の信頼関係を端的に表している。このことは現代の教育においても、教師と生徒との信頼関係が重要であることを示唆してくれている。

近世越中の教育事情を知ることによつて、我々は、今後の教育を考えるヒントを見つけることができるであろう。

主な参考文献

	書名	編著者	出版年	発行・出版
1	『富山県史』通史編IV近世下	富山県	1983	富山県
2	『富山県史』史料編V近世下	富山県	1974	富山県
3	『富山県教育史』上巻	富山県教育史編さん委員会	1971	富山県教育委員会
4	『富山県の教育史』	坂井誠一、高瀬保	1985	思文閣出版
5	『日本教育史資料』4	文部省	1892	文部省
6	『越中の人物』(富山文庫11)	奥田淳爾、米原寛	1978	巧玄出版
7	『人づくり風土記』16 ふるさとの人と知恵 富山	加藤秀俊 ほか4名	1993	農山漁村文化協会
8	『富山藩土由緒書』(越中資料集成2)	新田二郎編	1988	桂書房
9	『小西有實・小西有義両先生建碑記念帖』	小西両先生遺徳碑建設事務所	1931	小西両先生遺徳碑建設事務所
10	『二十六大藩の藩学と土風』	齋藤憲太郎	1934	全国書房
11	『近世藩校に於ける学統学派の研究 上』	笠井助治	1969	吉川弘文館
12	『郷土の先覚 海内果』	重杉俊雄	1967	重杉俊雄
13	『寺子屋』(日本歴史新書)	石川謙	1966	至文堂
14	『藩校と寺子屋』(教育社歴史新書)	石川松太郎	1987	教育社
15	高岡市古書古文獻シリーズ 第8集『高岡湯話(現代語訳)』	富田徳風著 篠島満訳	2003	高岡市立中央図書館
16	高岡市古書古文獻シリーズ 第9集『高岡詩話(現代語訳)』	津島北溪著 篠島満訳	2005	高岡市立中央図書館
17	『越中国の教育史』	明神博幸	2003	明神博幸
18	『特別展 まなぶ展』	富山市郷土博物館	1994	富山市教育委員会
19	『特別展 富山藩校 広徳館』	富山市郷土博物館	2002	富山市教育委員会
20	「藩儒岡田呉陽の人と学芸」(『富山史壇』50・51合併号)	高瀬重雄	1961	越中史壇会
21	「富山藩の藩学校」(『富山史壇』50・51合併号)	石原与作	1961	越中史壇会
22	「富山県の寺子屋の概況」(『富山史壇』78号)	前田英雄	1982	越中史壇会
23	「翻刻と解説・加賀藩藩下一寺子屋史料 一越中国射水郡姿村、広沢家文書一」 (『富山大学教育学部紀要』(A文科系 No.33))	深井甚三・広沢睦子	1984	富山大学教育学部

富山藩広徳館・加賀藩明倫堂略年表

年 号	西 暦	事 項
天和元年	1681	富山藩2代藩主正甫、南部草寿を招聘。
元禄元年	1688	藩儒南部草寿が没する。
元禄14年	1701	藩医杏一洞が没する。長男三折が家禄を継ぐ。
享保10年	1725	藩儒杏三折が「学問所」建設を建議。しかし、実現せず。
安永2年1月	1773	6代藩主利與、藩学創建を申渡す。
同 3月		三浦瓶山を招聘。
同 6月		広徳館開校、初代学頭は三浦瓶山。
安永4年	1775	広徳館の講師の学階を都講・監生・助教とする。
安永5年	1776	初めて積菜の礼式を行う。以後春秋2回行うことが恒例となる。
安永8年	1779	家中に広徳館出席を奨励する。
天明6年	1786	●加賀藩11代藩主前田治脩が学校創設を下命。
(寛政2年)	1790	江戸幕府による寛政異学の禁。
寛政3年	1791	市河寛齋を招聘とする。
同 2月	1792	●加賀藩藩校校舎竣工。
同 3月		●明倫堂および経武館開校、新井白蛾を学頭とする
同 6月		●定書を制定。(藩主治脩の親書に庶民まで開放する趣旨あり。)
寛政7年	1795	藩儒三浦瓶山が没する。
享和2年7月	1802	富山藩9代藩主利幹が広徳館の規則の一部を改正。
享和3年	1803	●加賀藩12代藩主斉廣による学制改革。 『曾子孝実』を出版。
文化元年	1804	儒者の自宅に家塾の創立を指示し、士風の刷新を図る。
文政5年7月	1822	●校舎を城西の仙石町に移築。
文化7年	1810	広徳館校舎を総曲輪から城中三の丸に移転。
文政3年	1820	市河寛齋が没する。
天保6年	1835	広徳館校舎を再建。(天保2年(1831)に焼失。)
天保8年	1837	富山藩10代藩主利保、文武奨励のため、「履校約言」を著す。
天保10年	1839	●明倫堂・経武館の規則を改正。
嘉永5年6月	1852	●国学が一般学科に追加。
嘉永6年	1853	富山藩前藩主利保、『本草通串』および『本草通串証図』を刊行。
安政元年	1854	●加賀藩12代藩主斉泰、壮猶館を開設(蘭学の導入)。
慶応元年	1865	13代藩主利同による広徳館改革。学則を改定し、杏凡山を祭酒とする。
慶応2年	1866	「四書集註」などを出版。
明治元年	1868	●経武館を壮猶館に合併。
同 9月	1868	広徳館焼失、民家を借りて継続。
明治2年	1869	広徳館廃止、「藩学校」と改称。 変則英学校を創立(後、洋学北校と改称)。 分校「徳聚堂」設置、一般町民の入学を許可。 西洋医学校を設置(後、洋学南校と改称)。
明治3年	1870	●壮猶館内に英学所を設立。後に致遠館と改称。
同 2月		●斉勇館(士官養成所)を設立。
同 10月		●医学館を開設。
同 10月		●明倫堂を廃止。
明治4年	1871	廃藩置県により、藩学の廃絶。

●印は、加賀藩藩校の明倫堂関係の略年譜

企画展史料一覧

	史資料名	所蔵	実物	パンフ	パネル	ポスター	ちらし
富山藩藩校 ― 広徳館 ―	「学校之事」	富山県立図書館（前田文書）	複製				
	南部草寿書簡	富山県立図書館	○				
	「利隆御代條目」	富山県立図書館（前田文書）	○				
	「学校御規則同沿革」	富山県立図書館（前田文書）	複製				
	「学校之事」	富山県立図書館（前田文書）	○		○		
	『詩経』（広徳館本）	富山県公文書館寄託（五十島家文書）	○	○		○	○
	広徳館孔子像	富山県立図書館			○		
	富山城下絵図	富山市郷土博物館			○		
	旧富山藩広徳館略絵図	富山県立図書館（前田文書）	○				
	広徳館出精により手廻組御雇方につき奉書	堀田家文書		○	○		
	「町吟味所御触留」 卷六	富山県立図書館（前田文書）	○				
	「諸芸雑誌」より履校約言自序	富山県立図書館（前田文書）			○		
	「履校約言略解」	富山県立図書館	○				
	高嶋流大砲免許状	富山県公文書館（半田家文書）	○	○			
	「学校御規則同沿革」	富山県立図書館（前田文書）	○				
	『寛斎先生遺稿』	富山市郷土博物館	○		○		
	「広徳館詩集」（写本）	富山県立図書館	○				
	『東渠公詩集』	富山県立図書館	○				
	五経（広徳館本）	富山県公文書館寄託（五十島家文書）	○				
	四書集註（広徳館本）	富山県公文書館寄託（五十島家文書）	○				
『本草通串』	富山県立図書館	○					
『本草通串証図』	富山県立図書館	○	○	○			
明倫堂・講武館等之図	金沢市立玉川図書館			○			
私塾	小西家三代合作書	富山市郷土博物館	○				
	『小西有実・有義両先生建碑記念帖』	富山県立図書館	○				
	「富山藩土由緒書」（岡田栗園の履歴）	富山県立図書館	○				
	商標合紋試刷	富山市郷土博物館		○	○		
	『易経』	富山県公文書館寄託（五十島家文書）	○				
	『高岡湯話』（写本）	高岡市立中央図書館	○				
	『高岡詩話』（写本）	高岡市立中央図書館	○				
寺子屋	「学規」（小山文書）	高岡市福岡歴史民俗資料館	○				
	『商売往来』（版本）	富山県公文書館（高堂家文書）	○				
	『小野篁歌字盡』（版本）	富山県公文書館（高浪家文書）	○				
	「童子教」	富山県公文書館寄託（五十島家文書）	○				
	『庭訓往来（字註絵入）』（版本）	富山県公文書館寄託（五十島家文書）	○				○
	「百姓往来」	富山県公文書館寄託（羽馬家文書）	○				○
	「加越能三州往来」	富山県公文書館寄託（五十島家文書）	○	○		○	○
	名頭づくし（習字手本）	富山県公文書館寄託（羽馬家文書）	○				
	「今川状」	富山県公文書館寄託（羽馬家文書）	○				
	『童子教』（版本）	富山県公文書館寄託（羽馬家文書）	○				
算用指引書（版本）	富山県公文書館寄託（羽馬家文書）	○			○	○	
岡田呉陽と その弟子	『呉陽遺稿』 上下	富山県立図書館	○	○			
	「栗園全集」（写本）	富山県公文書館（海内家文書）	○				
	「呉陽先生雑稿」	富山県公文書館（海内家文書）	○				○
	「呉陽先生文抄」	富山県公文書館（海内家文書）	○				
	「呉陽先生詩抄」	富山県公文書館（海内家文書）	○				



■交通機関

JR富山駅発バス

- ・北代循環(県立図書館前)下車……………徒歩3分
- ・四方經由新港東口行(県立図書館前)下車…徒歩3分
- ・高岡小杉方面行(呉羽山公園)下車……………徒歩10分